

【学校教育目標】 「自分とみんなのために 心を尽くし、学びを深め、ともに動く 大小っ子の育成」

【目指す児童像】 「気づく子 学ぶ子 元気な子」

玖城のほとり



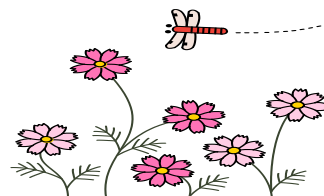
大村市立大村小学校
令和8年度学校だより
第9号
令和8年9月2日発行
文責：校長 堺 邦寿

★ 2学期が始まりました！ ★

45日間の長い夏休みが終わり、昨日から2学期がスタートしました。この間、大きな事故やけが等の連絡もありませんでしたので、ご家庭のご協力のもと、どの子も元気で楽しい夏休みを過ごせたことと拝察します。久しぶりに会う子どもたちは、一段と大きくなったように感じました。昨日の登校時には、夏休みにがんばって作った作品を大事に抱えながら登校する姿に、子どもたちの夏休み期間中の努力を感じました。保護者の皆様には、宿題をはじめとする作品づくり等への声かけなども、御協力いただいたことと思います。

地域では、夏休み期間中も子どもたちの規則正しい生活づくりのために、地域・保護者の皆様のご協力のもとラジオ体操が開催されました。私も7地区のラジオ体操に1回ずつ参加しましたが、本当に多くの子どもたちが参加していて、私も嬉しくなってきました。大村小の子どもたちが、地域の中で温かく見守られていることに改めて感謝申し上げます。

子どもたちは、1学期の終業式の日にした①自分の命を自分で守る、②夏休みにしかできないことにチャレンジする、③地域の行事に進んで参加し、地域の方々に進んであいさつする、ということを守ることができたように思います。これもひとえに、保護者・地域の皆様の御協力のおかげと深く感謝しております。誠にありがとうございました。



★ 2学期に大切にしてほしいこと ～始業式の話～ ★

学校では、学期が終わるごとに、子どもたちの様子をもとに反省を行い、次の学期に重点的に取り組むことを共有して、子どもたちのよりよい成長につなげられるよう努めています。2学期は、「よく考えて表現すること」を取組の一つとしており、昨日の始業式で子どもたちに次の話をしました。

私は、入学式の時に、がんばる三匹の「かえるさん」のお話をしました。一匹目の「かえるさん」は、まち・がえる「かえる」さん。二匹目の「かえるさん」は、かん・がえる「かえる」さん。三匹目のかえるさんは、元気におうちに・かえる、「かえる」さんでした。この三匹のかえるさんを大切にしてほしいのです。

特に、考えること。わからないことがあった時、すぐに誰かに答えを聞くのではなく、自分で考えるのです。どうしてかな。知っていることは使えないかな。別のやり方はないかな。考えることは、友達と仲良くするため、自分の好きなことを見つけるためでもあるのです。そして、考えることは、自分の未来を自分で選ぶためにも必要な力です。

もう一つ大切なことは、「間違えてもいい」ということです。考えて、間違えて、また考える。この繰り返しで、みなさんの「考える力」はどんどん強くなります。「考える力」が強くなると、学校がもっともっと楽しくなります。考えることが大好きな人が増えていくと、大村小学校が、毎日が、今よりもっともっと楽しくなります。みんなが笑顔で過ごせる努力を続け、2学期もみんなで温かく楽しい大村小学校をつくっていきましょう。

<お知らせ>

○大村小学校のホームページに、各月の行事予定表（下校時間含む）及び各学年の学年だよりを掲載しています。行事等の確認などの際にご活用ください。「大村小学校」で検索してください。

○教室棟の外壁塗装工事のため、駐車場については、保護者の方の駐車スペースが少なくなっており、ご迷惑をおかけしています。ご理解とご協力のほどよろしくお願いします。

※裏面に、木村指導教諭作成の「特別支援教育だよりNo.5」を載せています。ぜひご覧ください。

～みんなちがって みんないい (その5)～

いよいよ2学期が始まりました。今月は「神経発達症(発達障がい)」と「特別支援教育」「合理的配慮」についてお話しさせていただきます。

以前は「発達障がい」と呼ばれていましたが、DSM-Vの診断名に合わせて現在は「神経発達症」と呼ばれるようになりました。「神経発達症」には様々な特性と困り感があります。例えば知的発達に遅れは無いものの、授業中「じっと座ってられない」「おしゃべりや手まぜが多くなりがちで、時には教室外に出てしまう」「勝敗にこだわり、負けると癇癪を起こしたり極端にやる気をなくしたりする」「無気力で何事も面倒くさがり、登校を渋る」「暴言や汚言、屁理屈が多く、学習を最後まで遂行できなかったり、面倒がったりしがち」「間違えたり失敗したりするとキレたりパニックになったりする」「友だちとトラブルが多く、友好的な関係が築きにくい」「コミュニケーションが取りづらい」「ボーっとしていることが多く、動作が遅かったり不器用だったりして、周りと同じ活動に付いていきにくい」など、極々一部の事例ですが本人も周りも困り感を抱えてしまう子がいます。

他にも「環境が変わったり、初めてのことに戸惑ったりして、慣れるまでに時間が掛かってしまう」「計算は得意なのに、字を読むとたどたどしかったり、読めても内容が理解できていなかったりする」「漢字の読み書きや計算、図形の理解が他の子に比べると極端に苦手な遅れが見られる」など、「人見知り」「勉強が苦手なだけ」と困り感の本質に気付かれぬまま成長してしまう事例が多くあります。

これらの子どもの中には(大人も同様)「神経発達症(発達障がい)」と思われる子どもたちがいます。

このような困り感の原因は脳の機能障害に起因しますが、一見すると何も問題が無いように見えるため、「我慢が足りない」、「本人の努力不足」、「親の躾が悪い」などと誤解されがちです。この誤解が、「必要以上に厳しく躾ける」、「周りから能力を低く見られる」要因となり、「素行不良」や「精神疾患」などの2次障害に繋がることも少なくありません。

主な神経発達症は、SLD(限局性学習症)、ADHD(注意欠如/多動症)、自閉スペクトラム症がよく知られています。他にも「発達性協調運動症」や「選択性緘黙(場面緘黙:かんもく)」「知能が平均よりも高過ぎる高知能」など、神経発達症と呼

ばれる状態は多くあります。

以前にもお伝えしましたが、令和4年度の文部科学省による調査では、通常学級に在籍する児童生徒で神経発達症の可能性を示す児童生徒が8.8%、何らかの特別な支援が必要な児童生徒が28.7%いるとの結果が出ました。

「神経発達症は大人になれば治る」とか、「子どもの時だけ」ではありません。もちろん成人にも神経発達症の方はたくさんいて、気付いていない人や成人してから診断を受ける人も多いのです。

昨年もOECD(経済協力開発機構)が2013年に行った16歳～65歳を対象とした「読解力・数学的思考力・IT活用による問題解決能力」の国際調査の結果「日本人のおよそ3分の1が読解力に問題を抱えていること」をお伝えしました。2023年の調査結果では、「読解力」で高レベルを示した割合は23%で全体の4分の1、「数学的思考」で高レベル割合は25%でやはり4分の1の割合でした。苦手である、問題を抱えているレベルの割合は大きく変わりませんが、「状況の変化に応じた問題解決能力」については高レベルが10%なので、単純な計算はできるが少し複雑な応用問題にはかなり弱い、ということが分かります。

現代の教育では1人1台のパソコンが与えられたことで、様々な支援が受けられるようになりました。これにより、「読み書き」「文章理解」「書字作業等」に苦手さのある特性(SLD)は恩恵を受けられるようになりましたが、一方で「文を読んで理解し、想像を広げたり考えをまとめたり」する能力を伸ばす機会は減ってしまいます。保護者のみなさんの中にも「本は読むのではなく、アプリで聴く」という方も少なくないのではないのでしょうか？子どもたちの中には「読んでも分からないけど、聞いたら分かる」という子が多数います。「便利」＝「能力向上」に繋がるとは一概に言えません。本人が苦手なことをサポートする「合理的配慮」はとても大切ですが、成長を促しながら、少しずつサポートを減らしていけるよう配慮することも大切です。

「特別支援教育」に対して負のイメージをお持ちの方が多いと思いますが、「理解」と「支援」により子どもの可能性は広がります。

子どもの将来をより良い方向へ変えていくためには、保護者の方々、家族、教育者、地域全体が協力し、正しく理解し支え合っていくことが大切です。